

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～7◆

【指導のポイント】

説明文とは、ある事柄についての説明や解説を示し、文章構成の多くは順序立てた論理的説明である。論旨を捉える手段として、文章例を用いて指示語が指す内容を直前の内容から見つけ出すことを学ぶ。接続語は、そのはたらきに注目することで、説明文の展開や文脈の流れが把握できる。形式段落と意味段落の違いを学び、段落相互の前後の関係については、指示語や接続語のはたらきを手がかりにして明らかにする。実例を用いた練習を重ねることが重要である。

確認問題の板書例

■展開

〈考える〉

具体的なものごとを抽象化(第一条件)

* 対象化・客観化

概念の抄出

*の過程

① 動詞↓名詞(動く↓動き、教える↓教え)

② 接尾語「さ」(美しい↓美しさ、さびしい↓さびしさ)

③ 接尾語「み」(恨む↓恨み、重い↓重み)

概念・観念として客観化

← 思考の成立

*の逆過程

造語をつくる過程で考えが深化する

〈高度な文化をもつ異国からの概念・観念の流入〉

出来上がった概念・観念の流入

← そのまま代用することで、造語力低下

← 抽象能力低下

〈日本における哲学〉

← 哲学(抽象論とみなされ敬遠)

← 代わり

← 文学(具体的な現象を暗示的・象徴的に描く)

・原因

← 異国からの抽象語(ヨーロッパ語)を外来語(漢語)

← で訳したため(これでは*の過程を経ていない)

■筆者の主張(まとめ)

哲学はだれにでもわかる人生の知恵であるが、思考には抽象語を要する。異国の抽象語をそのまま代用してきた日本人は、まずそれを念頭に置かなければいけない。

重要語句

○思索⇨論理的に筋道を立てて考えること。

演習問題Aの板書例

■展開

〈回帰現象〉

人それぞれの基本的行動パターンが普段は抑制できても、いざという場面や緊張のときには表に出てしまう。

〈文化的な型〉

日本↓意見はゆっくり、間接的に表明

欧米↓意見は最初から明確に表明

・筆者は応対の際に気をつけているが、回帰現象が起き

てしまう (外交官マンスフィールドさんも同意)

① 大切なときに限って

② 本人も気づかない

・対処法

① 自分で気づいて相手に説明

② その状況から自分の姿勢を立て直す

重要語句

○愕然⇨非常に驚くさま。

演習問題Bの板書例

■展開

〈遊び〉

遊びという心地の良い活動の原初的な要素

・だれかが突然現れたり。消えたりする感覚

↓〈死〉のシミュレーション・ゲーム(怖い体験)

・身体感覚の激しい振幅

↓緊張と弛緩のすばやい交替

出現/消失 緊張/弛緩

↓存在の開閉という運動(遊びの快感)

遊戯としての遊び(Spiel)⇨ゆるんだ空間の遊び(Spiel)

遊隙⇨「遊びの空間」(Spielraum [ドイツ語])

↓シュピール・ラウム(隙間、ずれ、わずかな隔たり)

*「遊びの空間」は大きすぎても少なすぎてもだめで

あり、適度のものでなければならない

← わたしたちの身体とわたしたち自身(意識)の関係も同様

← 「ぼんさんが屁をこいた」

・現前と不在のたえざる交替

・緊張と弛緩という身体感覚の振幅

↓緩衝地帯としての身体の在り様

・緊張と弛緩という身体感覚の振幅

↓緩衝地帯としての身体の在り様

← わたしの存在と身体の存在が一致したり、離れ

たりすることができる。

■筆者の主張(まとめ)

緩衝地帯の身体は、かぎりなく従順であるが、おもいのままに制御できないこともあるというゆるみによって、わたしたちと身体との関係を滑りよくしている

重要語句

○緩衝⇨二つの物の間に起こる衝突や衝撃をやわらげること。

説明的文章(2)

◆指導ページ P.8～13◆

【指導のポイント】

論説文とは、自分の考えを論理的に述べた文章であり、既知の事実を根拠・理由として挙げて自分の主張の正しさを読者に納得させる構成である。筆者の言いたいことをつかむためには、事実と意見を区別する必要がある。具体例の役割についても学び、論旨についての理解を助けるはたらきになることを理解する。また、通読することで、説明事実→意見の「尾括型」、意見→説明事実「頭括型」などといった文章構成を読み取る。

確認問題の板書例

■展開

〈サルの群れ〉

リーダーのカミナリ(大人) ↓ 海には入らない

← いまわしげに見る

子供たち ↓ 海に入る

(新しい行動を開発していく)

突然の大波などは危険だが、子供たちは海へ入ることと泳ぐ、水に潜るといった楽しさなど、新しい世界を切り拓いた。

〈構図〉

年のいった者と若者について、

サル ↓ 人 に置き換えられる

年のいった者 ↓ 保守的

若者 ↓ 革新的行動型

両者は水と油

〈教訓〉

① ギャップを埋めて相互理解(×保守頑迷)

② 冒険心こそ若者の特権

■まとめ

サルより高等な人は、保守頑迷に走らず、柔軟な思考と深い理解を持ち新しいものを探求する心を持ち続けるべきである。

重要語句

○代弁＝本人に代わって他の人が債務を弁償すること。

演習問題Aの板書例

■テーマ

道具に宿る創造的な感性

■展開

道具 ↓ 身体的機能を助長(知覚や感覚の深化)

機械 ↓ 知性による計算の助長(知性や感覚の代替)

〈鉋〉

鉋 ↓ 台鉋

(作業は効率的になるが、一種の鈍感に落ち込む)

← 槍鉋の復活 ↓ 「味」

〈一般大工〉

・短い工期と安い費用(↓効率化)

・工務店の現場監督者、機械技術者である実態

〈職人〉

道具を使っている者に宿る文化・文明を支える感覚

(文化の重荷)

演習問題Bの板書例

■テーマ

言語発達過程に見る概念化について

■展開

〈「ワンワン」が犬として概念化される過程〉

必要条件(子供の側→A)

① その音が物理的に耳にとどくこと

② 種々の刺激の中から、その音を図として取り出す

*図と地(ゲシュタルト心理学)

図 ↓ 知覚野の中の前景

地 ↓ 前景に対する背景

(知覚世界は図と地に分節する)

〈「一緒に見る」といった現象〉

→ゲシュタルト学派は全く言及していない

・母親の側→B

① 他の刺激情報を地に沈める

② 自身の声と「犬」に意識を向け、図として立ち上げる

■まとめ

AとBの双方の過程が成されて音が概念化される。

説明的文章(3)

◆指導ページ P.14～19◆

【指導のポイント】

事実を述べている段落と意見を述べている段落を区別し、意味段落にまとめ、意味段落の相互関係から文章全体の構成をつかむ。文章構成は、序論→本論→結論または起承転結などの型がある。要旨を捉えるには、話題やテーマを捉え、段落毎の要点を捉え、結論を捉える。また、要旨をまとめるには段落毎に筆者の意見を抜き出し、まとめてから重複部分を削る。テーマとキーワード、結論は必ず含め、簡潔に表現するよう注意する。

確認問題の板書例

■展開

〈理論体系〉

- ・科学 ↓ 公共性を持つ理論体系
- ・オカルト ↓ 公共性を持たない理論体系

公共性：一定の手続きさえ踏めば、だれがやっても同じ結果が出る

再現可能性：科学を宗教やオカルトから区分けする基準
↓ 理論の枠内では、世界のコントロールが可能

← しかし、オカルトを信じる人は少なくない

ヒトは再現可能性ではなく、同一性を信じている
↓ 再現可能性という基準がなければ、どんな同一性を信じるかは好みの問題

信じることができる ↓ 神、実体、法則
信じることができない ↓ 科学が示す目に見えないもの、イメージすらできないもの

←

科学が複雑になりすぎたため、普通の人には、神を信じることで変わりがなくなってしまう。

■主張

科学はオカルトと違い、再現可能であり、だれがやっても同じ結果が出るという同一性によって、多くの人々に信じられてきた。しかし、科学が進歩し複雑になった結果、普通の人々が信じるにはあまりにも難しくなってしまったため、非科学的なオカルトを信じる人も少なくはない。

演習問題Aの板書例

■展開

〈クローン羊のドリー〉

機能分化した細胞からつくられた
(既存の知識に反する)
← 遺伝子の細胞分化への働き(基礎的)
乳牛・肉牛の改良(応用的)などではなく

人間でもそれが可能か?
↓ ヒトには応用しないとして世界で一致

〈科学と科学技術〉

科学(世界についての人の好奇心)
← 原理の応用

科学技術(↑ 人間の欲望を可能にする)

■筆者

科学は両刃の剣であり、技術的な応用は倫理にゆだねられている。

重要語句

○是非〳正しいことと正しくないこと。

演習問題Bの板書例

■展開

〈羨ましい気持ち〉

(前提条件)
・物でも能力でも、自分の持っていないものを他人が持っている
(プラスX)
・未開発の能力

← 「羨ましさ」

〈弟を羨む兄〉

スポーツマンの弟が有利な就職
← 自分はそれに劣る就職だから、手を抜くことを正当化
← 結局、仕事をしない兄
← 弟を羨む

*未開発の部分〳仕事に手を抜いている
↓ 未開発の可能性

■まとめ

羨ましさは素直に受け入れ、自身が未だ取り組んでいないところを見つめるべきである。

文学的文章(1)——小説

◆指導ページ P.20～25◆

【指導のポイント】

小説とは、人物の心情、話の筋を通して、人間性や社会の姿を作者の想像力・構想を基に表現した散文体の作品である。小説の三要素(人物・背景・事件)について簡潔に説明し、小説の読み取りを実践的に指導する。全体のあらすじをつかみ、主人公の人柄や心情、他の登場人物との関係、それぞれの気持ちの動きや変化をとらえる。情景や自然の事物に大事な心情が反映されていないか注意し、山場から主題をとらえる。

確認問題の板書例

■場面

長兄と耕造さんの話し合いで家の増築が決定し、わたし(主人公)はその詳細を聞いている。

■出来事

わたしは台所でぎょうぎの悪い食事をしている
 ← 長兄に呼ばれて庭に出て、二人(長兄と耕造さん)に合流(げげんな様子)
 ← わたしと享一の部屋を増築することを聞かされる
 ← 長兄が家に上がり、わたしと耕造さんで話す
 ← 木の枝で長方形を描き説明
 ← 長方形⇨茶の間の押し入れ、とにかく費用を抑える
 ← わたしはわくわく

重要語句

○梅檀⇨センダン科センダン属の落葉高木。

演習問題Aの板書例

■出来事

洪作が子供を連れて、所長さんの家に朝顔を届けに行く(おぬい婆さんからの依頼。洪作はそれが相応しくないと思っている)

← 御料局の玄関の横手の仙人掌が目に入る
 ↓ 朝顔は貧乏だ
 ↓ 届ける気が失せる
 ← あき子に遭遇
 ← お使いであると強調
 ← 「まあ、きれい」
 ↓ 洪作は紅潮
 ← あわてて帰る
 ↓ 多分に甘美で、どこか秘密にしなければならぬ物哀しさ
 ↓ 恋

重要語句

○土蔵⇨日本の伝統的な建築様式のひとつで、外壁を土壁として漆喰などで仕上げられるもの。

演習問題Bの板書例

■場面

日曜日に、引越した山麓の家に帰って来た。

■出来事

息子から自転車の補助を外す催促
 ← 工具を出して作業を始める
 (工具の名前を教えながら手伝わせる)
 ← 息子は補助を外すのが少し遅い
 ↓ 病気がち+かまってあげなかった(反省)
 ← 小学校に行つて練習
 ↓ 下の女の子も連れて。難しい年頃の上の女の子は来ない

重要語句

○縁台⇨個人の家の庭や近所の露地において、休息や夏場の夕涼みなどに用いられる主に木製の腰掛。

5

文学的文章(2)——随筆

◆指導ページ P.26～31◆

【指導のポイント】

随筆は、筆者の見聞・経験・感想などが自由な形式で書かれ、筆者の心情や考えなどがよく表れた文章である。思索的随筆、文学的随筆など種類があるため、それぞれの特徴について説明する。随筆の読み方は、話題、テーマをおさえ、筆者の心情や考え方を読み取る。時や場所、人間関係などから筆者の立場をおさえ、筆者の考えや心情を述べている部分に着目する。また、筆者独特の表現から作品の特色をつかみ、筆者が感動した内容から主題を捉える。論説の結論のように主題が一つの段落にまとめられているとは限らないので注意する。

確認問題の板書例

■テーマ
父の書斎の整理

■展開

〈出来事〉

蔵書整理のため父の書斎に上がる

（父が他界して、そのまま。ついに改築する）

机に絶筆の原稿と万年筆と干からびたミカンが残る

壁にかかる散歩着から、汗のかすかなにおい

書斎の天袋でつかえされた原稿を見つける

（凄絶な闘いにかけて父の魂）

その原稿を持って庭に出る

満開の白いハナミズキの花が強風に揺れる

（つかえされた原稿）

父の書斎

家の中の孤島

・所狭と積まれた原稿や資料

・仕事のときは別人

〈現役時代の父〉

・会社から帰宅して、夕食を終えると直ちに書斎へ

・体調の悪いときでも自分を奮い立たせて書斎へ

重要語句

○虚勢 〓 見せかけの威勢。

演習問題Aの板書例

■テーマ
京言葉の市民生活での機能

■展開

〈生粋の京女の叔母〉

江戸ッ子の開業医の言葉(世辞ぬき)

叔母の創出・翻訳

・叔母の尊大を表現

・開業医は叔母より位が下であると表現

「かしこく」で、「しっかりとしたはる」

さりげなく位を取るのが美德

↓ 会話中で第三者を持ち出し、その人との上下関係

で位取りすることもある

重要語句

○生粋 〓 まじりけが全くないこと。

○体 〓 外から見た物事のありさま。

演習問題Bの板書例

■テーマ
自身の九州方言

■展開

〈自身の方言〉

九州方言(外地から引き揚げた父母からの唯一の贈り物)

東京に来てコンプレックスを感じる

アイデンティティとして受け入れる

*物事をシンプルにしていくこと(合理主義)は大事だが、日本語が均一化してしまうことにはためらう。

〈思う事〉

地方性のある言葉は土着のものであり、それを有する自分の日本人としての従属感を意識する。

重要語句

○引き揚げ 〓 他国に入植した者が、入植を断念し、本国に帰国することを指す。

【指導のポイント】

古文読解の要点として主語の省略や現代語と同じ形で意味が異なる語に焦点を絞って学ぶ。動作主や会話の主体は敬語表現や話の筋から主語を判断する。現代語と同じ形で意味が異なる語、現代語にない語からよく用いられる重要語句は、例文を用いて解釈・説明する。また、文学史を概観、各時代の重要な古典作品をとりあげて説明する。古文独特のリズムに慣れさせるために、扱う古典作品を何度も音読させる。

確認問題の板書例

<p>1</p> <p>■文法事項 「にはかに」↓「にわか」(語頭にない「は」)↓「わ」 ・「やをら」 そつと</p> <p>■内容 藤原宗輔は蜂を飼っていたが、世間の人は役に立たないと言っていた。五月のあるとき、彼が上皇のところに行った際に、偶然に蜂騒動を枇杷の実一つで治めた。上皇は彼を大層賞賛した。</p>	<p>2</p> <p>■文法事項 「奇怪なり」 けしからぬことだ ・「いとけなき」 幼い</p> <p>■内容 〈場面〉 河のほとり、狼と羊が水を飲んでいいる。 〈会話のやり取り〉 狼 どうして、私の飲む水を濁すのか。 羊 川下の水は濁したが、川上が濁ることはない。 狼 おまえの父が六カ月前に川上を濁した。親の罪はおまえにかかる。 羊 その頃、私は母の腹にいて、父母の罪は知らない。 狼 それだけではなく、おまえは野山の草を傷めた。 羊 私は幼く、草を傷めるようなことはない。 狼 なぜ私に悪口を言うのか。 羊 ありのままを話しているだけだと説明。 狼、問答をやめて羊を食べたいことを白状する。 *ものの 道理が理解できない人と、事の良し悪しを言い争ってもどうしようもない。</p>
---	---

演習問題Aの板書例

<p>1</p> <p>■文法事項 「いはむ方なし」↓何とも言いようがない ・「えもいはずおほきなる」 「えもいわずおほきなる」 (何とも言えないほど大きい) ・「とどまりぬ」 とどまった ・「ぬ」(完了の助動詞)↓「した」</p> <p>■内容 まだ夜が明ける前から足柄山を越える。山の中は何ともいいようがないほど恐ろしい。雲は足で踏めるぐらいのところにある。山の半ばにある木の下のおかずかなどところに、葵がほんの三本ほど生えているのを見つけて、人里離れて、こんな山中にでも生えるのだからと、人々は趣を感じた。水はその山では三カ所流れている。</p> <p>■内容 どうにかして足柄山を越え切り、関所のある山にとどまった。これより先は駿河となる。横走の関のそばに、岩壺という所がある。そこには何とも言えないほど大きく、四角で中に穴の開いた石があり、中から湧き出る水が、清く冷たく、この上なかった。</p>	<p>2</p> <p>■文法事項 「月ごろ」↓数カ月(「年ごろ」)↓数年、長年 ・「かく」↓このように</p> <p>■内容 昔、貫之が土佐守をしており、任期を終えた年に、かわいがっていた子が病気で死んでしまい、悲しみに暮れていた。何カ月も経った末に、都に上る決心をしたが、その悲しみはいやされるのがなかったため、柱に歌を書きつけた。 都へと思ふにつけて悲しきは 帰らぬ人のあればなりけり (都へ帰れると思っても悲しいのは、共に帰京せず、それどころか「この世」へも帰って来ないあの子がいるからだ) と書きつけた歌は、今でもまだ柱にある。</p>
---	---

演習問題Bの板書例

<p>1</p> <p>■文法事項 「いかで」 どうして ・「疾く」 早く ・「もがな」↓強い願望(「いかで…もがな」で対応)</p> <p>〈土佐日記〉 平安時代にかかれた日記文学。紀貫之が土佐国から京に帰る最中に起きた出来事を虚構を交えてつづったもので、紀行文に近い要素ももっている。</p>	<p>2</p> <p>■文法事項 「いとをかし」 とても趣がある</p> <p>〈枕草紙〉 平安時代中期に書かれた随筆。清少納言が宮廷の日常生活で経験したことや、自然や人事についての感想などが、簡潔な表現でかかれている。</p>	<p>3</p> <p>■文法事項 「むつかし」 わずらわしい ・「なかなか」 かえって ・「つれづれにて」 退屈で</p> <p>■内容 これといった用事がないときは人をむやみに訪ねるべきではない ↓用件はさつと済ますべき ・いやそうに話すのはよくない ↓理由を明確にして、不満を明かすべき ・お互いに向き合いたいときは、その限りではない</p> <p>〈徒然草〉 鎌倉時代末期に書かれた随筆。兼好法師のふりかへての「見聞・感想・評論」などが、鋭い批評眼や美的感覚で書かれている。</p>
--	--	--

詩 歌

◆指導ページ P.38～43◆

【指導のポイント】

詩の種類は、用語、形式、内容によって分類できることを学ぶ。詩の表現技法として、比喩・擬人法・対句などについて学ぶ。比喩は直喩と隠喩を区別し、擬人法は適切な具体例をあげて説明する。短歌の「句切れ」については、5つのタイプをそれぞれの例を用いて具体的に説明する。俳句については、主な「季語」と「切れ字」を中心に説明する。

確認問題の板書例

<p>1</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代の話し言葉、特定のリズムや形式はない ↓ 口語自由詩 ・7行目「さかななその鳴きごえ」 ↓ 体言止め(名詞で終わる) ・8行目「地球はこっそり朝の方へころがって走り」 ↓ 擬人法 ・10行目～11行目 「星雲の列のように―ひと塊づつ」 ↓ 倒置法 「ように」 ↓ 直喩法 	<p>2</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> A 「一ひらの雲」 ↓ 体言止め B 三句切れ C 三句切れ 「けり」 ↓ 切れ字(区切れになる) D 「たんぽぽの花」 ↓ 体言止め E 「かくな」 ↓ 切れ字(区切れになる) 「かくまで」＝「こ」までも 	<p>3</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> 〈季語〉 A したれざくら ↓ 春 B 蜻蛉 ↓ 秋 C 鯉のぼり ↓ 夏 D 寒雀 ↓ 冬 ・CとDは体言止め
--	---	---

演習問題Aの板書例

<p>1</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第一連、第二連「落ちて来る木の葉よ」 ↓ 反復 ・「落ちて来る木の葉」＝「お前は死の匂いがする」 「そして私に死を思わせる。」 ↓ 落ちてくる木の葉を「死」としている 	<p>2</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> 名詞で終わる ↓ 体言止め A 「清滝の里」 B 「公園」 D 「白雲」 	<p>3</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> 名詞で終わる ↓ 体言止め B 「鷹」 	<p>■内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11行目「死がかさこそ落ちて来るのだ」 ↓ 木の葉が落ちる＝死が失せる(生きる希望がわく) ・15行目「私に生を愛惜させる」 ↓ 生きること強く望む 	<p>〈季語〉 〈季節〉</p> <ul style="list-style-type: none"> A 秋燕 ↓ 秋 B 鷹 ↓ 冬 C 白鳥 ↓ 冬 D 雉 ↓ 冬
--	---	--	---	---

演習問題Bの板書例

<p>2</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> A 縁先に―干したる柿に日短し― 郵便配り食べて行きにけり B 垂乳根の―母が釣りたる青蚊帳を― すがしといねつ―たるみたけれども C 街をゆき―子供の傍を通る時― 蜜柑の香せり―冬がまた来る E 薄氷嶺の―南おもてとなりけり― くだりつつ思ふ春のふかきを F 「雪のように木の葉のように」 ↓ 対句法 「ように」 ↓ 直喩法 「さくりさくりと」 ↓ 擬態語 	<p>3</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・季語：「鶯」(↓春) ・切れ字：「や」 	<p>■内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・啼く ↓ 音声 ・小さき口あいて ↓ 視覚情報 啼き声を引き出されるばかりの「鶯」のその啼き姿に目を向けている 	<p>F</p> <p>■内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 雪や木の葉のように軽くてはかない母のお骨を掬ってしまふとき、逆に生前の生きていたことを思い返す。
---	---	---	--

